

創刊にあたり

会長 足利 惇 氏

今次の大戦の結果、わが国は高き芸術と深き学問を高揚して世界に誇るべき文化国家として立つべきことを内外に標榜した。しかし、武力で失敗したから今度は文化で行くと言うような考え方自体は、はなはだ幼稚きまわるものであつて、芸術や学問を真にわが国に芽萌え成長し開花し結実さすためには単に標榜的な安易さ通りに事が運んで行くわけのものではない。いわんや、それを世界の標準以上に推し進めて行くためにはよほどの努力と辛抱とが絶対的に必要であることは言うまでもない。残念ながら敗戦後十餘年たつた今日でも、わが国民の文化に対する一般的な考え方なり態度なりは、戦前と大して変つたものとは思われない。

かつて英雄ナポレオンは、エジプトに遠征した際多くの学者たちを連れて行つてこの未知の国土を徹底的に研究させたが、後日「エジプト誌」の膨大な発刊によつて当時の祖国フランスにおける知的標準を世界に示し今日のエジプト学の濫觴となつた偉業を後代に遺した。敗戦後のわが国において、かつてかくの如き企てあることを聞かない。一つの仕事をなすのに当つてどんなに失敗に終うとも多少のプラスは必ず残るものであるが、わが国民の敗戦に対する精神的な慢性的虚脱状態のせい、また強いてその悪夢を忘却し去らんと願う逃避主義のせい、学問としてのこの種の事業は少しも起らず、アジアに対する無知は依然として戦前なみであることは慨然に耐えない。今日思つても惜しまれてならないのは、東西交通の自由な戦前の時代にわが国の人々が十分にこれら海外の事情を知つていたら、すなわち、単なる常識より数歩進んだ科学的な思考に基づいて諸外国の自然や人文に関する研究を大成していたならば、あんな戦争は必ず止め得られたであろうし、かりに起つたとしてもあままでつまらぬ結末を見ないですんだであろう。今次の戦争の遂行によつて我々が今更ながら中国の偉大さを身に滲みて知り得たと言うが、実に迂闊なことで我々の無知と怠惰とを暴露したものと見えよう。とにかく今日に至つても我々が外国の事情をあらゆる面から研究すべきことは、将来文化国家建設の一員として立つべき当然の知的資格であり、また義務と言わなければならない。これは平和的に国民の視野を拡げ善隣友好の精神を養うものであると同時に、わが国文化における個性や地位を自覚すべき有力な反省の手段として役立つことは明らかである。

而してこの地球上における多種多様な諸文化に対するわが国の学問研究の現状は、これで良いと言う程度の満足すべき状態には残念ながら未だ到達せず、否むしろ放置してあると言うのが実情である。学問の先端を行き最高峰を示すべきわが国大学の講座や研究所を見ても、この方面に

対する科学研究は決して世界一流の国家なみとは断じて言うことを得ない。流石に中国や仏教の学問についてはわが国の歴史的事情もさることながら世界の学問の水準以上を行くものとして讃辭を惜しまないが、その他に関しては未だしの感が深い。特にわが学界が今なおその確立を怠っている方面は、西南アジアの文化圏についてである。二十世紀後半の歴史に必ずこの西南アジアの民族や国家の活動が刮目せらるべきことは、今日の世界情勢の動きから見ても我々が確信して読み取られるのであつて、その意味においてもこの地方の組織的研究はわが國民化とつて実に鯨眉の急と言わねばならぬ。この地方の文化の大宗をなすイスラム教に関して一講座すら有しない大学は、けだし文化国家の大学として世界の笑い物であり、これは正に恥辱に近い。東南アジアより印度へ、ペルシア・アラビア・トルコ、更にエジプト・イスラエル・メソポタミアに関する学問的研究は、人類としても当然追究すべき重要な課題であつて、われわれもそれらの研究に参加すべき権利を持つている。しかしこれらの研究遂行にも要は人の問題である。我々は有用な若き研究者を育成し支援すべき使命を痛感して已まない。

わが京都大学西南アジア研究会は、わが国における以上の如き学問欠陥の分野に一步を踏み込み、学生と教官の共同の研究の場として成立したものである。自然系と人文系とを問わず、苟くも西南アジアにおけるあらゆる事象に興味を有し研究せんとする人士の来り会する自由闊達な会合である。多数の参加者を望んで已まない。本会は、その研究の性質上常に現地についての実証を必要としている。日本の水とアラビアの水とではその味が違う。それは経験者のみ^{のみ}が知り得ることであろう。勿論、今日のわが国富の現状から見てこの方面に多数の学者や学生を派遣することには多くの支障があるが、それが極めて重要であるが故に能う限り実現させて行きたい。

西アジア文化の古さについて

宮 崎 市 定

世界各地の古代文化の中で、西アジアの文化が最も古い起原をもつことは、現今一般に信ぜられていて異論がないようである。ところでそれが果してどれだけ古いかという問題になると一概に言えない。またメソポタミアとエジプトとで、何方が古いかということになると議論が分れる。そして、どれだけ古いかという問題は、同時に文化一元論か、多元論かという問題にも関聯してくる。例えば西アジアの文化の起原が、中国文化のそれに比して著しく古いとなれば、具体的な証拠の裏付けがなくても、西アジア文化の影響によつて中国文化が発生したであろうことが、十分に推測せしめられるからである。